

---

# 琴語りき命

小野みゆき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

琴語りき命

### 【Nコード】

N0041J

### 【作者名】

小野みゆき

### 【あらすじ】

大変お久しぶりでございます。諸事情により一度撤退しましたが改めて再開致します。

文久三年の春、琴代の父である勇八が京都の街中で何者かに惨殺された。奇跡的に生き残った者の話では相手は土佐の浪士であったと言う。父の仇を討とうと誓った琴代と弟の勇助はそれぞれの方法で独自にその下手人を探し始める。真夏の七月のある日、河原町五条付近で下手人探しをしていた琴代は土佐弁の剣士に襲われる。逃げ

る彼女を一人の青年が助けるのであった。

父の死により動き出した琴代の運命はやがて幕末の激動の渦に飲み込まれていく。忘れられた真実が蘇った時に琴代の取る行動は？

## プロローグ1：昭和二十九年からの手紙

拝啓

冬の厳しい寒さも和らぎ暖かな春を迎えようとしている今日この頃、元気で過ごしてでしょうか？

私は今、長年住み慣れた家の自室で妻や子、孫たちに囲まれながら過ごしております。

長い人生の中、争いの絶えない時代の最中で私は日本人として皆さんの戦争を経験してきました。

人も数え切れないほどの手で殺しました。

幾度も死の危険に晒されながら戦い逃げ延び、今はこうして紙とペンを手にあなた方への手紙をしたためています。

一昨年、私は倒れた際に医師より死の宣告を受けました。肺癌です。

発覚した時にはすでに手遅れでした。体中にガン細胞が転移しており切除は出来なくなっていたのです。

余命は半年だと告げられました。

この手紙を書いている今、医師の余命半年を過ぎ二年程生きながらえています。

しかし、それも終わりのようです。まもなくあなた方の元へ私は逝きます。

ようやく会う事ができます。

見つけた際はどうか快く私を迎えてください。

敬具

昭和29年3月5日

息子より

父へ母へ

## プロローグ1：昭和二十九年からの手紙（後書き）

ある人物の手紙で始まりました。

時は第二次世界大戦後の昭和からです。

ちゃんとした手紙文の書き方を心得ていなかったのでネットで調べながら書き上げました。

では、これから長い物語が始まります。

どうぞお楽しみください。

【プロローグ】武士の子／第1話「沖田総司幼少編」(前書き)

幼少の沖田総司が主人公の話です。全2話

## 【プロローグ】 武士の子 / 第1話 「沖田総司幼少編」

それはうんと小さな頃の話である。その頃、沖田総司……いや、沖田宗次郎は江戸の白河藩屋敷の周辺に住んでいた。家族は父と母、そして姉二人である。貧しい足軽の武家でありながらも彼らはそれなりに幸せに暮らしていた……はずだった。

その日、沖田家は深い悲しみに暮れていた。父の勝次郎が死したのち、後を追うように母が病で死んでしまったのである。沖田家に残されたのは姉二人と姉の一人であるミツの夫の林太郎、まだ五歳にもならない幼い弟の宗次郎の四人である。母の死がまだ理解出来ない宗次郎は不思議そうに目の前のお墓を見つめている。

「ミツ姉、どうして母上を土に埋めちゃうの？」

今や若くして沖田家の血筋の者として年長者となったミツは真つ赤に泣き腫らした目を晒しながら宗次郎に話す。

「母上、病気で苦しかったから……、死んで父上のいる黄泉の国へ行っちゃった……。」

「僕たちを置いてって？」

宗次郎の顔にはなんで？の文字がくつきりと浮かんでるように見える。ミツはしゃがんで宗次郎の目線に合わせながら、

「そう。黄泉の国に行かないと治らない病気だから……母上、ごめんなさいって泣きながら行ってしまったの。」

「じゃあ、治ったら母上は帰ってくるんだね！」

「……………」

宗次郎はそう結論づけたのか、また帰ってくると思って笑顔になった。その姿を見てミツは目を伏せ悩んだ。死んだ人間は二度と帰って来ない。やはりまだ四歳の宗次郎に理解しろといっても難しすぎるのだ。



「ねえ姉上、これからどうしよう？」

ミツの妹のキンが不安そうに問いかけた。本当は泣きたい気持ちはやまやまだが両親が共に死んでしまったという現実がそれを踏みとどまらせた。さらに沖田家には大きな問題を抱えている。

「家督は何とか私が継いだけど、今の家禄では四人分の生活は苦しい。どうすれば……。」

「おミツ……。とりあえず今は何とかするしかない。」

ミツの夫の林太郎は励ますように妻に言う。しかし、厳しい現実が変わらない。ミツとキンは深いため息をついて悩んだ。林太郎もそれを黙って見てるしかない。何も分からない、理解できない宗次郎は不思議そうにきよとんとした目で彼らを見つめていた。

それから五年後の事……。

「宗次郎ー！、宗次郎ー！！！」

ミツは家中、弟の宗次郎を探したが見つからなかった。何かお使いを頼みたかったようでその顔はぷりぷりに怒っている。

「もう、姉上諦めたら？」

キンはキリキリと神経尖らせる姉に「諦めが肝心」と一言言い残す。それにミツは怒りを露にする。

「諦めが肝心、じゃ、ないでしょ！？父上も母上もないんだから私達四人で力合わせてこの沖田家を切り盛りしなきゃならないですよ！！それなのに宗次郎ときたら！」

と、ミツは気合入れるように腕まくりする。ああ、この様子だと今夜は……、キンはミツの様子を見て苦笑いを浮かべた。

（ま、宗次郎がどうなるかと知ったことじゃないからいいけどね。）  
沖田家の次女は薄情、というか淡泊である。神経質な姉と明るく無邪気な弟に挟まれたせいであろう。

キンは立ち上がるとミツへと近づぐ。

「はい姉上、多分宗次郎を待っても無駄だと思うから私がお使いに

行ってくる。」

「いいの？」

「だって、忙しいでしょ？私は丁度暇だし。」「  
キンが右手の平を差し出した。それを見てミツは深いため息を吐いた。」

「……しょうがない。じゃあ、お願いできる？買ってきてほしいのは……。」

そうして二人の姉は話し込んだ。

こういう時に宗次郎がいなくなるようになったのはつい最近だった。無邪気で冗談好きで悪戯盛りの弟ではあるが、家の手伝いはよくしていたものだ。それがなぜ手伝いを放棄するようになったのだろうか？

そしてその頃、宗次郎は……。

「宗次郎くんも大変ね。」

「そ、そうですか……？」

宗次郎は近所のお店が立ち並ぶ街の区画まで遊びに来ていた。ここ最近、姉であるミツがとにかく煩くなってきたので、頃合いを見計らってサツと逃げ出してきたのである。後で拳骨が待ってるだろう事は想像できるが嫌なものは嫌なのである。

「宗次郎って姉上が二人もいるんだよね？羨ましいなあ。」

訪れていた店の幼い娘が宗次郎を羨ましそうに見つめている。少女には姉はなく兄三人と妹と弟が一人づついる中間子だった。宗次郎はいかにも嫌そうに眉を顰めて少女を見ている。

「ええ……？そうかなあ？姉上って言うてもどっちもうるさいし怒ると怖いよ。僕は煩い姉上より強い兄上が欲しかったよ。それか妹。」

既に両親が他界しているので叶わぬ事だと分かかっていてもやっぱり憧れるものである。

「あらあゝ、お姉さんの事そんな風に言ってもいいのかしら？後で

言いつけちゃおうかな？」

娘の母がそう言つと宗次郎は瞬間、その後の姉の怒れる様子を想像して顔をブンブンと振った。

「おばさん！後で姉上達が怖いからやめてください！」

「フフフツ、冗談よ、冗談！」

「ほ、本当に？」

「ええ。」

本当に言うつもりがないらしい娘の母の様子を見て宗次郎は思わず深いため息をついてしまった。全く心臓に悪い。

「ああ~~~~！！宗次郎！！！！！」

楽しそうに話し込んでいたら突然、遠くから聞きなれた叫び声が耳に入ってきた。宗次郎は思わずビクツと肩を震わせる。

見れば姉のキンが怒り顔で宗次郎の下へとやってくる。宗次郎は怒られる事が分かっているのか全速力で逃げ始めた。

「ちよつと、宗次郎お待ちっ！！！」

しかし子供の足では年上のキンに叶うわけもなくあっけなく御用となった。宗次郎はジタバタと手足を泳がせながら抵抗している。

「ヤダー——！はなしてよ~~~~！！！！！」

「だ・め！！あなたのせいで私がお使い行く事になったんだからね。これ、あなたの役割でしょう!？」

そういつてキンはチャリチャリと小銭の入った財布を宗次郎の眼前で揺らしてみせた。

「めんどくさい、嫌だ——！」

「ふ~~~~ん、そう言うのね。姉上が言っていたよ。このまま手伝わなかったら夕飯抜き、だってよ。」

そう言つてキンはいたずら小僧の様にニヤ~~~~と笑顔を浮かべてみせた。

「それも嫌だ——！」

「あんたねえ……。」

「嫌だつたら嫌だ——！」

ペシッ

キンが宗次郎の頬に平手打ちをした。本気で怒っている。

「宗次郎、いい加減にしなさいっ!!! あんた、ちよっと最近我侭すぎよ!!! うちがどれだけ苦しいのか、あんただって知ってるでしょう!？」

「だって…。」

「だってじゃない!!!」

本気で叱り飛ばすキンに宗次郎は俯くとその瞳に涙を浮かべた。肩が小刻みに震えている。

「分かったのならお願い。これはあんたの仕事よ。」

そう言つて小銭の入った財布をキンは差し出した。しかし、宗次郎はそれをバシッと振り払う。

「!!! 宗次郎、あんたなんて事っ!!!!!!」

「姉上達なんて大っ嫌いだ!!! 僕を追い出すくせに!!!!!!」

「!!!」

宗次郎は大粒の涙を流しながら怒りを込めた瞳でキンを睨むと背を向けてどこかへ走り去っていった。

突然の言葉にキンは路上に散らばった小銭を拾う事なくしばし呆然の体で宗次郎の去っていった先を見つめるしかなかった。

夜になつても宗次郎は帰つてこなかった。

「おミツ、宗次郎を探そう。このご時世じゃ子供一人外にいるのは危険すぎる。」

林太郎はミツにそう言つと、縁側でぼうっと考え込んでいたミツは頷いた。

「そうね…。」

ミツは何処か憔悴した様子で頷いた。その表情は酷く暗い。

「口減らしの事、いつ知ったのかしら。あの子に知られないように秘密にしてたのに。」

「子供って言うのは案外賢い。俺達が秘密にしてるつもりでも何処かで聞いてしまっていたのかもしれないな。」

「……………」  
戸口へ向かうと外からパタパタと走ってくる足音が近づいてきた。バツと戸を開けたのはキンである。走ってきたのか、額に汗を浮かべ、息を切らしている。

「あ、姉上、宗次郎が見つかった。」

その言葉にみつも林太郎もハツとした。ミツは思わずキンにしがみつく。

「ど、どこ!? どこにいるの??」

「近所の商店街を過ぎた先の川べり。橋の下にいたわ。」

「よし、いそいで向かおう。」

その頃、宗次郎はその橋の下で未だ止まる事の知らない涙を拭きながら一人、小さな体を包み込むようにうずくまっていた。

「みんな大嫌いだ。ほんとは僕の事なんていて欲しくなくせに。」

ある日の事だった。夜、宗次郎はのどの渴きを覚えて起き上がり、井戸に向かう途中で話し声が聞こえてきた。

「姉上、宗次郎は傷つくわよ!」

「仕方ないじゃない!他にどうしろっていうの!??」

姉達の言い争う声が聞こえてきた。こっそり覗けば、姉たちと林太郎がいる。三人ともその表情は深刻である。

「今の禄ではとても成長していく宗次郎を養っていく事はできない。何処かへ奉公に出すしかないの。」

「納得できない!」

その会話に宗次郎は思わず固まってしまった。今、姉たちは何と言った?

(奉公…? 武士の子なのにな?)

武士という身分上、何処かへ奉公に出すというのは世間的に風聞が悪い。

『おキン、仕方ないんだ。ほら、これが今の全財産だ。』

ジヤリ、という音が襖の向こう側から聞こえてきた。お金を取り出したようだ。

『……………、こ、これだけしかないの!?!』

『たったこれだけのお金でどうやって宗次郎を育てていくというの?』

ミツの言葉にキンは押し黙った。俯いて考え込んでいる。

『おキンが内職してくれてるお陰で少しは楽になったけど、宗次郎が元服するまでの生活を維持するのは不可能だ。』

『それに…………』

そして、その後続くミツの言葉は宗次郎の心にグサリと刺すものだった。

『あの子がいるとこの沖田家の風聞は悪くなるばかり。長男でありながら家督を継げないあの子は武士の子としてここにはならない。』

(……………!)

ミツのあまりの言葉に小刻みに体を震わせながら宗次郎は後ずさりをはじめた。その顔からは血の気が引いて真っ青になっている。

『…お役目務めてるけど、最近、屋敷での俺達の評判は悪い。長男がいるくせに女が家督を継いで農民の俺が武士ぶるのは恥の上塗りだ。このままじゃ、お役御免にされかねない。』

『…!! そんな事になったら!!』

『そう、俺達みたいな足軽の武士は真っ先に切られる。禄を支払う対象が減ればお殿様はそれだけ楽になるからな。』

『…白河の殿様の財政、切迫してるって聞いたわ…………』

宗次郎は真っ白になって何も考えられなくなった。自分はこの間だけで邪魔な存在。宗次郎の頭の中はその言葉に支配されていた。

「もう、嫌だ。もう、いやだ。」

ずずつと垂れてくる鼻水を袖で拭くと宗次郎は足元に流れる川を眺めた。月の光に照らされて反射する川の水はきれいで澄んでいる。

「いた、宗次郎！」

声のする方を見ると、道端の向こうから姉たちがやってくるところだった。彼らは慌てて宗次郎の下へ近づくとキンは宗次郎を抱きしめ、林太郎はホツと安堵の息を吐いた。

「宗次郎！」

バシツとミツは宗次郎の頭を思いつきり平手打ちすると怒りを込めた眼で宗次郎を睨みつけた。

「何するんだよ！」

「あんた、いつまで外をほつつき歩いてるの！外は危険だからさつさと帰ってきなさい！！」

その言葉にキンは非難めいた眼でミツを見つめる。

「姉上ツ！それはひどいじゃない！無事でよかったねとか、何か気の利いた事は言えない訳！？」

「悪かったわね！これでも凄く心配したのよ！！」

「二人とも抑えて。」

林太郎は慌てて仲裁に入る。が、それを見た宗次郎は本当に自分の事はどうでもいいんじゃないかと思わずにいられない。

「……………」

「宗次郎、無事でよかった。お前、もしかして俺達の話聞いてたのか？」

しかし宗次郎は不信めいた目で見るばかりで何の反応もしない。

「…聞いたのね…」

ミツはしゃがみ込むと宗次郎の目線に合わせ、そして頭を撫でる。

「ごめんね、宗次郎。でも、もうどうにもならないのよ。このまま共にいても私達はあなたの面倒を見る事ができない。」

「……………お金がないから？」

「そう。宗次郎を養っていくのに必要なお金が私達にはないの。私達やおキンは自分でどうにか出来るけど、まだ幼い宗次郎ではどうにもならない。何処か養ってくれるところへあなたを連れて行くしかないの。」

「…僕は邪魔者なの？」

それにミツはそうじゃないと頭を振って否定する。

「宗次郎、あなたは大切な弟。本当は手放したくない。だけど、このままここに居ても不幸にするだけ。だから私達は出来る限り信頼の置けるところへあなたを連れて行くことにしたの。」

その後の言葉を林太郎が引き継ぐ。

「宗次郎、次の月が来たらお前は近藤周助先生の開く天然理心流という道場へ内弟子という形で入るんだ。実践型の剣術を教えている道場だ。」

そう言つて林太郎はポンと自らの手を宗次郎の頭の上に置いた。だが、宗次郎は不安に満ちた表情で、

「僕はもう帰つてきちゃ駄目なの？」

と言つた。再び宗次郎の目に涙が溜まつていく。

「もう、帰つてこれないの？」

宗次郎のこの問いにミツたちはただただ顔を合わせるだけで頷く事も首を振る事も出来なかつた。

「う、う…、うわああああん…。」

人通りのない川べりの橋の下、無力な子供でしかない宗次郎は姉に抱きしめられながら涙が枯れるまで泣き続けた。

父も母もなく、姉たちでさえも自分から奪つていってしまう現実の残酷さを受け入れるしか今の彼には出来なかつた。



【プロローグ】武士の子／第2話「沖田総司幼少編」(前書き)

幼少の沖田総司が主人公の話です。全2話

## 【プロローグ】 武士の子 / 第2話 「沖田総司幼少編」

「ありがとうございます。」

そうお礼を言うとミツは深々と向かい合って座る男達に頭を下げた。隣のエ太郎も同様に頭を下げる。

二人がいるのは江戸の市ヶ谷にある試衛館と呼ばれる天然理心流の剣術道場であった。

天然理心流とは寛政年間に遠江出身の剣客である近藤内蔵之助が興した剣術の流派である。この剣術は主に武州多摩地方を中心に栄えた流派で門人は約1500人に上る。試衛館はその内の一つで現在は三代目宗家の近藤周助がその道場を取り仕切っている。

向かい合うように座る男、近藤周助とその養子であり次期四代目とされる島崎勝太は頭を下げお礼を述べるミツとエ太郎に頷いた。

「確かにこの話受けました。宗次郎君も承諾したのであればいつでも迎えられるように準備しておきましょう。」

「よろしくお願いします。」

周助の言葉にミツはそう言うのと下げた頭を上げて周助と勝太を見た。二人とも鍛え上げた体つきをしており見るからに頼りになりそうな雰囲気を持っている。そんなミツの視線など気にしてない様子で勝太は愛嬌のある笑顔を浮かべてミツに話しかける。

「何だか新たに弟が出来るみたいで今から楽しみです。私が楽しみにしている」と宗次郎君によく伝えておいてください。」

「はい。」

勝太の言葉にエ太郎は頷いた。

「宗次郎、お手伝いはしなくてもいいから外で遊んでなさい。」

一方その頃、沖田家では宗次郎が何か手伝うと申し出たがキンは首を振って断った。あの夜の大泣き以来姉も義兄も宗次郎にとても優

しい。

「あんたには辛い思いをさせてしまったからね。せめて試衛館に預けられるまでの間は自由にいて欲しいのよ。」

「キン姉……。」

そう言ったときキンは宗次郎に背を向けて黙々と昼のご飯の支度を進めた。その背中を宗次郎は寂しそうな眼差しをしながら見つめている事しか出来ない。

(かまって欲しい……。)

それが宗次郎の本心だった。両親の愛情をよく知らず育った彼である。本当ならば他の家の子のように親に甘え、姉たちにあれこれ言われながらも家族みんなで楽しく過ごしたいのだ。でももうそれは叶わぬ願いとなった。

宗次郎はキンの邪魔をしないようにとこっそり彼女の元を去った。弟の足跡が聞こえなくなるとキンはその体を震わせその瞳に涙を浮かべる。

「……………なんで……、なんでこうなるのよ……………」

まだ九歳なのに、そう呟くとキンは両手で顔を覆って誰にも悟られないように静かに泣いた。

「ミツ姉もキン姉も怖いし嫌いだと思ってたのに……………」

キンの元を去った宗次郎はとぼとぼと江戸の街中を歩くと近くにあった川の袂に腰掛け、その透明な水の流れを見つめながらそう呟いた。

嫌いであったはずの二人の姉、その実、そんな姉たちを何よりも大切に想っていた事はこういう時になって初めて分かるものだ。二人ともまだ子供の自分を親代わりとなって面倒を見て育ててくれたのだ。宗次郎自身、生活が厳しいのは幼心によく理解していた。だから自分は少しでも力になりたくて手伝っていた。最近になってそれをしなくなっただけは見放され捨てられる事に対する反発であった。

「…離れたくない、離れたくないよう……。」  
生活が厳しくてもいいから家族の元を離れて暮らしたくない、知らない人達に預けられるのは嫌だ、一人知らない世界に放りだされてしまう孤独感に耐え切れなくて宗次郎は膝に顔を埋め嗚咽を漏らしながら泣いた。

そしてそれから一ヶ月後、とうとう長く暮らしてきた沖田家を離れる日が訪れた。

宗次郎はミツ、キン、林太郎の三人に連れられながら試衛館へとやってきた。試衛館道場の門を潜り道場へ行くと中から裂ぱくの気合の声が複数聞こえてくる。

戸を開けると周助が勝太を始めとして門人達に稽古をつけている最中であつた。

(す、す……い……。)

初めて目にする剣術稽古に迫力を感じて宗次郎は思わず目を奪われた。誰も彼も見ることからに重たそうなく長い木刀を持って全身汗だくになりながら無心にそれを振るっている。

周助は宗次郎らの姿を見つけると彼らの元へと歩み寄ってきた。宗次郎の傍まで来ると周助は彼を見る。

「お待ちしております。この子が宗次郎君ですね？」

「はい。御年九歳になります。」

周助の言葉にミツは頷いた。

「これから君の面倒を見る事になるこの道場主の近藤周助です。よろしく宗次郎君。」

「は、はい。よろしくお願いします。」

宗次郎はどっしりとした体格の周助の迫力に緊張を覚えながら頭を下げて挨拶をした。まだ子供で背も小さい彼に笑顔になりながら周助は頷く。

「宗次郎君の部屋を始め、内弟子として暮らしていくにあたって必

要なものは全て用意しました。先日の話通りこの子は我々が責任を持って一人前の剣士に致します。」  
その言葉に安心したのかミツはホッとすると深々と頭を下げてくださいますと述べた。

「宗次郎、しっかりと頑張るのよ。」

そういうとキンは優しく宗次郎を抱きしめる。抱きしめられて宗次郎の双方の目からうつすらと涙が浮かんできた。宗次郎の手は自然とキンの着物の裾をギュツと握り締める。だけど無言で何も言わなかった。

「離れていてもお前は大切な家族だ。」

林太郎は泣くのを必死に堪えている様子の義弟の頭に手を乗せると優しく撫でた。その瞳は優しい。

一方、長姉のミツはその様を少し離れた場所で両手で自らの体を抱きしめるようにしながら見つめているだけであった。そんな姉を宗次郎は見つめる。

「ミツ姉……。」

小さく呟いたその名に彼女は反応しなかった。ただただ睨むように見つめるばかりである。

「ほらミツ……。」

宗次郎に何もしないミツに林太郎はそつと背中を押して促す。しかしミツはそれを拒否して頭を振ると宗次郎に背を向けてしまう。宗次郎は切なそうな瞳でそんな姉の背中を見つめると小さく、しかしミツに届くように呟く。

「僕の事は心配しなくてもいいから……。」

宗次郎の言葉にミツの背中が小刻みに震え始めてきた。そんなミツを見つめながら宗次郎は言葉を続ける。

「ちゃんとここで頑張って稽古をして一人前の武士として恥ずかしくない僕になるから。」

宗次郎は溢れそうになる涙を堪えながらミツを見つめて静かにそう

言い放った。それでもミツは宗次郎に背を向けたまま、しかしその言葉を確かに聞き取った彼女は微かに漏れる嗚咽を堪えながら頷いた。

【プロローグ】武士の子／第2話「沖田総司幼少編」（後書き）

沖田総司の幼少編でした！

全体的に暗い話になってしまいました。すみません（-\_-;A

・

さてミツとキンですが彼女たちの性格はウチの両親に姉妹がいるので彼女らを参考に書かせて頂きました。父は上に四人の姉、母は三姉妹の長女なんで。

お陰でミツがすごいそんな役回りになっちゃって可哀想な事をしてしまいました。

そんな訳で次回は大見家のプロローグです。

そして暗いです（-\_-;）

## 【プロローグ】おかあさん〔大見家幼少編〕

一八五〇年《嘉永三年》の事…。

会津の象徴、鶴ヶ城が見える城下町の一角に、とある足軽の武士の一家が住んでいる。その家の主の名は大見勇八といい彼には若き妻と娘と息子が一人ずついる。

その大見勇八は今、この会津の地にはいなかった。参勤交代のためである。

参勤交代とは慶応五（一六〇〇）年に勃発した関が原の戦いで勝利した徳川家康が天下の覇権を掌握し江戸を居城として幕府を開いた事で各地の大名が徳川家康の元へ参勤するようになった事が江戸時代における参勤交代の始まりである。大元の始まりは鎌倉時代にまで遡るが、江戸幕府の三代目将軍徳川家光が武家諸法度の改定等によって参勤交代は義務化。幕府の役職につく全ての大名が一年毎に江戸に出仕する事になっていたのである。

大名が江戸に出仕するからには無論その配下の武士達もその行列に加わる。その為、大見勇八は長らく会津の家を不在にしていた。

「ゴホッ、ゴホ…。ゴホゴホ、…ゴホッ。」

閉じられた襖の向こうから女性が苦しそうに咳き込む声が聞こえてきた。一人の小さな女の子がその閉じられた襖を黙って見つめている。女の子の名を琴代という。この大見家の長女である。彼女の顔からは血の気が引いており見るからに今にも倒れそうな感じであった。

その襖の向こうにいるのは彼女の母であった。母は家の主である勇八が参勤交代で不在になって暫くしてから労咳に冒され寝たきりとなっていた。



「おや、お琴じゃないか？」

ぼつんとその場に佇んでいると一人の老齡の女がゆつたりとした口調で琴代に話しかけてきた。その女の名を藤原トキという。隣の家に住む由緒ある上士の武士の家の一人で今は隠居の身となっていた。

「おばあ様、母上のところへ行つちや駄目だべか？」

まるで義務でもあるかのようにそう聞いてくる琴代をトキは痛ましそうに目を細めながら首を横に振る。

「いぐでねえ。昨日もお医者からよう言われとるべ。お琴の母上はあんべ良くないから同じ部屋にいと病が移つてしまつと。」

「…で、でも……。」

「でも、ではねえべ。いい子だから近づぐでねえ。」

そう言つて頭を撫でるトキの言葉に琴代は俯くと小さな両手をギョツと握り締めながら震えた。

その夜の事である。

辺りが深い闇に覆われたこの時刻、布団に包まれていた琴代はそつと起き上がつて隣で寝ている弟を起さないように立ち上がつてどこかへ向かつていった。

その小さな音に弟は目を覚ます。裕之助という名のその男の子は何事かと辺りを見渡すと隣で寝ていたはずの姉の琴代がない事に気づいた。寂しがりやなのか涙を浮かべて泣きそうな顔を見ると何処か頼りなげな足で暗い家の中を姉を捜し求めた。

「あねうえ…、どこ…？」

震える声で裕之助は姉を呼んだ。しかし何処へ行つたのか琴代の返事をする声は聞こえてこない。母が病に罹り父も不在の今、裕之助にとつて琴代が全てであった。甘えられる家族が彼女しかないのである。必死になつて捜し求めた。

「…あねうえ、いるの？」

裕之助の耳に物音が聞こえてきた。裕之助はその暗さも相まって怖いと思ひながらもそつと静かな足取りでその音の発生源へと向かう。

「…あねう…」  
そこへ辿り着いた裕之助はあるものを見て声を失った。そこに姉が確かにいた。だがしかし、それを目撃した裕之助は恐怖のあまり一歩も動くことが出来ず凍りついたまま見ているしか出来なかった。

それから半年後に母は幼い子供達を残して死んでしまった。

その頃には江戸から帰ってきていた勇八は妻の病と現状を知る事が出来なかっただけに大きな衝撃を受けて暫くは呆然の体で過ごした。母の葬儀はそんな中、ごくごく身内の者だけでしめやかに執り行われた。

勇八はもちろんの事、魂の抜け殻のように母の遺骨のある祭壇の前で座り込む琴代とその姉の着物の裾を握りべったりとくっついたまま離れようともしない裕之助もそこにあった。

【プロローグ】おかあさん〔大見家幼少編〕（後書き）

子供時代の主人公たち一家の話でした。

ま、またしても暗い話ですみません（・・・；）

プロローグである事を仄めかしながら次回から本編が始まります！

## 第一話「天誅」

一八六三年《文久三年》四月二日の夜も更けた春の日の事。

街の者達が各々寝静まったその時間にバタバタと何人もの足音が決して幅広いとはいえない京の道中を駆けていた。走り回る彼らの辿った道を振り返ってみれば、そこには数人の男達がそこら中に真っ赤な血を撒き散らして倒れ伏していた。

皆、死んでいる。

ある二人の月代さかやまの武士が必死になって血に染めた刀を振り上げながら先を走る男達を追っていた。

「おらが殿、松平肥後守様の為にもあんだらを逃がさねえ!!!」  
武士の一人が声高に叫んだ。それに対し追われる男達は心動かされる事なく言い返す。

「何が松平肥後守様だ!!!おんしらは単に將軍の言いなりになつちゆう会津城主の狗だろうが!!!」

忠誠誓う殿を侮辱する言葉にもう一人の武士は思わず激昂した。

「無礼者!!!おらが殿に何と言う事を!!!上様と殿の名のかけてあんだらを処断すつぞ!!!」

「やれるものならやってみろ!あしらは天子様へ忠義を尽くすのみ!!!」

そうして彼らは激しく斬り結んだ。ギンツと金属同士のぶつかり合う音が辺りに響く。

不逞の輩を追う男達は遠くはるばる会津よりやって来た武士だった。京都守護職という名の京都の治安維持のために一八六二年に結成されたばかりで会津藩主・松平容保まつだいらかたもりを頭にその数千人ほどの会津藩兵で結成された公用方だ。

会津の武士は一筋縄ではいかない屈強の男達だった。だが相手も負けていない。元より自らを鍛えてきた輩なのか、いくら精一杯戦っても一向に隙を見せないのである。

「あんだらただの浪士ではないな!!」

「はっ！当然ぜよ！敵の陣地にあだつがやき力無しでやってくる馬鹿が何処におる!!!」

天子へ忠義を誓うと言うその輩はそれなりの袴を身に纏う良い風体をしていた。戦う内に敵である藩兵達の間を見出したらしく、それを逃さず見事に斬り伏せてみせた。そこにまた大量の血の雨が降る。一人になってしまった武士は思わず青ざめ倒れた同志を見る。

「治郎！おい、治郎!!!……くっ、なんだべ……」

京の都にやってきてから半年足らず。主である松平容保の命により訪れた地だが今日のこの日を呪うしかない。自分の腕の程は長年の経験からそれなりに自信があるが、腕の立つ輩にたった一人で対峙したところで生き残れる可能性は無いに等しい。

「……勇助……お琴……、すまねえ……」

その武士の名を大見勇八おおみゆうはちという。足軽である大見家の現当主である。彼は勤王きんのうを声高に叫ぶ男達を前に自らの子供達の名を呟いた。おそらく自分はこの場を生きて残れまい。せめて最後に一目、愛した人の忘れ形見である子供達の立派に成長した姿をこの目に見納めておきたかった。

そして、勇八は捨て身覚悟で相手へ斬りかかった。相手は二〇代の男で一回り年上の勇八は体力的不利だが倒した。自らの刀に相手の血がこびりつく。それをビュツと振り払うと構え直して次の相手へ斬りかかった。しかし相手は複数で叶うはずも無く背後から無言でザツクリと斬られた勇八は周囲に大量の血を撒き散らしながら地に伏した。即死だった。

勇八を斬り殺した輩は満足げにその死体を見つめると胸元から一枚の紙を取り出した。それをはらりと血だまりのないところに落とす。そこには「天誅」と大きく書かれていた。

「ち、父上が!?!」

京都守護職本陣である黒金金戒光明寺の境内のとある一角、最初にその訃報が伝わったのは勇八の息子である勇助だった。御年十八になる年若き青年である。彼は幼い頃から共に同じ道場で鍛えてきた同志である森山愛之助から事の次第を聞くと脇目も振らずに勇八の元へ行こうと走り出す。

「待て、勇助！！」

そんな勇助を愛之助は声を張り上げて止めた。その声に立ち止まる勇助を見て彼は続けて話す。

「勇八殿は亡くなられた。全員が不逞浪士に斬られてしまつてつけど一人だけ何とか生き残つた者がいんだ。話を聞きに行くべ？」

勇助はギリギリと手を握りしめると怒りの抑えきれない瞳を床に向けながら無言で頷いた。

そしてその者の元へ向かう途中、愛之助は勇助に注意を促す。

「その人の名は稲庭玄三いなばげんそくというんだけど、必要以上に問い詰めねえで欲しいんだ。意識はあつけど相手がよつぽど腕の立つ連中だったみたいで斬られた痕の傷が深えんだ。おそらくは助からねえ。」

「何だつて！？」

いきり立つ勇助を宥めると愛之助はここだと閉じられた襖を指差した。中からは苦しそうなうめき声が聞こえてくる。

愛之助はそつとその襖を開けた。中には数人の藩士達に会津お抱えの医師、そしてその医師の足元には布団の上で苦しそうに呻きながら男が一人寝かされていた。斬られた傷が深いのか巻かれた包帯も止血止めに使われてる布も真つ赤に染め上げられていた。

「大木様、勇助をお連れしました。」

そう言うとき愛之助は膝まづき深々と礼をした。勇助もそれに続いて礼をする。やってきた二人を見て大木と呼ばれた医師は頷いた。

「待っていました。もう既に森山さんから話は聞いていますと思いましたが稲庭殿が何とか生きていますね。彼が死ぬ前に勇助さんに伝えたい事があるそうです。」

「…はい。」

そして大木に促されて布団の上に横たわる稲庭の元まで行くと勇助は彼の名を呼ぶ。呼ばれた稲庭はうつすらと目を開けると勇助を見た。

「勇助……。おら……たちを、襲つ……た奴は……、土佐……の者……だ。その……殆どは、俺たち……でも勝てるはず……の輩だった。……けど、一人、異常に強い……者がいた……。あい……づが勇八を殺した……罪人だ……。」

途切れ途切れにゼイゼイと息を切らしながら稲庭は苦しそうに伝えた。そして更に彼は続ける。

「勇助……、勇八は……常に謝つて……いた。辛い……思いを、させた……と、自分が……ちゃんとしていけば……あんな……事には……ならなかった……。おら……には、何の事……か分からな……いが、お前は、分かつか……？」

稲庭の言葉に勇助はジツと彼を見つめるとその瞳を閉じた。暫くすると勇助はその年には似合わぬ大人びた瞳で無言で頷く。

「………んだか……、ならいいべ……。」

そう言うのと力尽きたのか、稲庭はフツとその意識を手放した。勇助は慌てて稲庭の体に触れる。それを大木は制して稲庭の手首を取って脈を図った。

「大丈夫……意識を失つただけです。勇助さん、父の勇八殿は隣部屋で安置されています。会つてあげてください。」

そう言われた勇助は一人隣部屋へと訪れた。スツと襖を開けると暗かった室内に僅かに光が差し込む。先日切り殺された物言わぬ骸は真っ白な布団と布に覆われ、底冷えするような冷たい氷を遺体の胸にどっしりと置きながらそこに安置されていた。お陰でその遺体からは死臭は漂ってこない。

僅かに開けた襖を閉めると勇助は父の元へ静かに歩み寄つて膝まづいた。そして顔を覆う布を取り払うと土気色した父の顔が現れた。「………うそだべ……。なあ、うそなんだべ？」

溢れそうになる涙をグツと堪えながら勇助は勇八の顔を見つめた。

彼の顔には斬られた際の血が生々しく付着したままとなっていた。勇八の顔に触れてみる。胸に置かれた冷たい氷の影響で彼の体は冷たく硬くなり始めていたがそれでもまだ生きる温かみがそこにあった。父が死んだだなんて信じられない。

「俺、これからどうしろって言うんだ…。どうすれいんだ…。謝られたって…。今更謝られたってどうにもなんねえべつ…。」

俺はただ…。そう吐き捨てるように呟くと勇助はギョツときつく目を閉じて昔幼い頃の事を思い出していた。



## 第二話「土佐浪士を探して」

勇八の死から三日後の事である。

京都警護のために上洛した会津藩兵が本陣とする黒金金戒光明寺から南西の、鴨川よりも西の烏丸通り方面のとある一角に勇八の娘である琴代が長屋を借りて過ごしていた。

彼女は昨年冬に父と弟について来て上洛した御年十九の娘である。琴代は今、この京の都において生活の為近場の旅籠で働きながら生活していた。足軽の家の生まれゆえに家禄が少なくそれだけでは生活していけないからである。

その日、彼女は旅籠の女将から休みを貰って家事仕事をしながら過ごしていた。井戸から水を汲み、部屋から持ってきた衣類を入れた大きめの桶にその水を浸して洗濯板でそれらを洗う。着物の裾が汚れないように紐でたすき掛けにしながら力いっぱい洗っていた。そんな彼女の元に誰かの足音が近づいてくる。その音に気づいて見ればやつてきたのは弟の勇助であった。どこか疲れてやつれた様子で彼は姉を見つめている。

「どうしたべ、勇助？」

姉の問いかけに勇助は答えず黙って彼女を見つめていた。姉を見つめるその瞳は潤み、動揺の隠せない色を帯びている。そんな勇助の様子を見れば何かがあったのは一目瞭然であった。琴代は作業の手を休めて立ち上がり心配そうに勇助を見る。

「勇助……？」

「……………姉上、父上が……。」

そう呟くと勇助はそれつきり俯いて黙り込んでしまった。その様子を見れば何かがあったのか察しがつく。

「……………父上が……死んだの？」

京の町をはびこる過激な尊攘派浪士を取り締まっているのである。

いつそこういう事態になつても不思議ではない。琴代は出来るだけ落ち着いた様子で確かめるように勇助に聞いた。姉の問いに勇助は頷き肯定する。

「何故……………」

そう言つと琴代は勇助に背中を向けてしゃがみ込んだ。両手で口を押さえて何かを堪えている様子である。そんな姉の背中を見つめながら勇助は本陣で得た情報を琴代に伝える。

「一人だけ生きていた人がいたんだ。その人の話じゃ斬つた奴は土佐弁の勤王の浪士で凄腕らしくですよ。父上はその人と他数人で一緒に市中警備をしてたんだつちや。大半の浪士はしつちやもんでねえらしいんだけど一人だけおんぐすねえ浪士がいたつてこくんだ。多分、そいつが父上を殺した仇。」

「土佐の……………」

そう呟くとそれっきり二人は黙り込んで一言も話さなかつた。琴代が何の感情も籠らない表情で洗い上げた洗濯物を桶ごと持ち上げると自らの長屋にまで持ってきた。そしてそれを部屋の入りの前に立ててある物干し竿に干していく。

「勇助…………、どうすんだ？」

一通り落ち着くと琴代は畳の上で黙つて座り、腕を組んで考え込む勇助に問いかけた。その問いに答えるのははばかれたのか、勇助は迷いの色をその顔に浮かべる。

「……………、仇を…………、捜す…………、んで、斬る……………」

暫く迷つた末に勇助は短くそう答えた。短く答えた勇助は心に決めたのか強い意志をその瞳に宿して虚空を睨みつけていた。肉親を殺された恨みは必ず返す。そう語っているように思える。

そんな勇助を琴代はジツと見つめた。勇助の姿を見て自分はどうかたいのか、そつと問いかける。その瞳を彷徨わせると視界の端に自分が愛用している薙刀が映つた。そこで湧き上がった感情を悟られまいと琴代は目を伏せる。

「…………、勇助だけにやらせねえ……………」

「え？」

琴代の呟きを勇助は聞き取れなかった。何を言ったのか気になって、どうしたのかと問いかける。しかし琴代はその問いには答えず、ただ一言、無茶はしないでと言つて台所へと向かった。

そして父・勇八の葬儀が済んだ後、勇助は勇八を殺した下手人を見つめるべく愛之助と共に勇八が殺された付近の町で聞き取りを開始した。一軒一軒の家を廻り、愛之助の助力を受けながら勇助は仇が何者なのか探つていく。

「何か気づいた事はありやしねえべか？」

愛之助が付近の住民にそう聞き出す。ところが……。

「分かる訳あらへん！ようウチは外から聞こえてくる怒号や断末魔が恐ろしくて恐ろしくて蒲団被つてしまいのを待つとつたんや！多少剣を握れへん程度の腕しかない、庶民のウチらが誰かが斬りあつてる時に外に出よつたら死にいかはつたみたいなモンやる！」

そう怒の含んだ声で言つと女はさつさとその場を去つてしまった。

住民に聞き出すがさつきからこんな感じで詳しい話を聞きだせない。

勇助と愛之助は困り果ててその場で立ち尽くしてしまった。

「話にすらなんねえべ……。」

そう呟くと勇助は腕を組み深くため息をついてうな垂れる。同じく腕を組む愛之助は他に有力な手掛かりがないか考えている。

「今、この京に来ていゝる土佐浪士組がねえか調べてみた方がいいかもしれないねえな。」

「俺もだな。なんか無駄足踏んだ感じがする。だけど、それをどうやって調べくれっぺいんだ？」

「決まつてつぺ。地道な聞き込みだ。」

一方その頃、勇助同様父の仇を探し始めた琴代だが彼女もまた早々に行き詰つていた。

旅籠で働いているとはいえ、生来社交的とは言えない性分をした彼女ゆえに、上手い事相手から情報を聞きだせず苦勞をしている。

「琴代はん、あんさんの様な女子が探し出してどないしはるん？その手で相手を潰すのか？」  
琴代にどんな印象を持ったのか、店番をしている相手の男は腕を組むと訝しげに眉を顰めながら彼女に問いかけた。

それから、何の進展も無いまま三ヶ月が過ぎた。京の街は相変わらず天誅の嵐で人斬りが絶えない。父親の仇を探している間、日本の情勢はますます不安定な方向へと傾いていた。

五月十日、遙か西の長州では下関で外国の存在を強く拒む尊攘派が外国商船を砲撃したとの噂が京の街中で流れた。遠い長州での事の為詳しい事は分からないがこのご時世である。何があっても不思議ではない。

更に今月七月に入ってすぐに薩摩と英吉利イギリスが戦をしたという。昨年、薩摩の殿様一行が異人の商人に斬りつけたというからその報復に英吉利が薩摩に攻撃したのだろうと住人たちは囁きあっていた。京都の街は天子が住まう遙か昔からの日本の中心都市である。国内の情報はいくつ地方からやってきた人々や瓦版などから瞬く間に伝わっていく。

真夏の七月の日差しが暑いこの日、琴代は河原町五条付近を中心に土佐の浪士を探し回っていた。

「あんさん、会津の人ではおまへん？そないおなごが土佐の浪人になんの用や？」

土佐弁の人間が出入りする店を探しては一つ一つあたって行く琴代だったがどんなに素性を隠しても店先の人には言葉の響きで東北特有の訛りを見つけられてしまい仇討ち探しは完全に行き詰っていた。

「…何でもありません。ありがとうございます。」  
店先の男にそう告げると琴代はその重い足取りで五条通りを歩き始めた。

(…なんで私はいつもこうなんだんべ……。)

情けないことこの上なかつた。この三ヶ月、仇討ち探しをして得たものは一体何だったのだろうか、今の自分のやっつてる事は本当に正しい事なのだろうか、このままでは永遠に父を殺した下手人は見つからないままなのではないか、そんな考えが頭を過ぎる。そうしてぼんやりと歩いているといつの間にか狭い小路に彼女は迷い込んでいた。

「あれ？なんだべ？五条通り歩いていたはずなのに……。」

規則正しく区画が作られている京都の街中でどうしたらこんな狭い道に入り込むのか、戸惑いの隠せない表情で辺りを見渡して思わず呟いた。

このご時世、人通りの少ない狭い小道で女一人歩くのは危険この上ない。早く抜け出さねばと歩いてきた道を引き返そうと振り返ったその時だった。

「な、何!？」

目の前に二人の男が琴代の行く先を遮っていた。その男たちは琴代を見ると途端にニヤリと口元を歪めて腰の刀を抜き放った。

「……………え?」

「おんし、あしらの事を調べちよつたにかあーらんな…、会津の女。」

男の一人が土佐訛りの強い口調でそう言うと右手に持つ刀の切っ先を琴代のあご下に当てる。突然の事に琴代はどう反応すればいいのか分からず戸惑っている。

「すまないが、あしらに害をなすもんは斬らんといけない。あの男の命だ。」

(……………仇……………仇!?)

琴代は胸元に隠していた脇差を取り出すと鞘から刃を解き放った。しかし男たちはその脇差をみて鼻で笑うのみだった。琴代を恐れる様子は全く見られない。

「怖い目をしちゅうのおんし。可愛い顔がちゃちゃだ。」

そして男は刀を高々と振り上げるとその切っ先を迷わず琴代へと振

り下ろす。その剣先を琴代は左手にも持った脇差で受け止めた。そして右手の脇差で男の顔面を狙う。さすがの男も琴代のまさかの反撃に驚いて慌てて後ずさった。

「戸川さん、この女の剣は素人の剣がやない。」

「ああ、素人は二刀流らあて扱えない。」

琴代は男たちをギツと睨むと殺してやると両手の脇差を構えて相手を斬る体勢に入った。しかし今着ている着物では何とも動きづらい。相手が手練だったら殺されるかもしれないと恐怖を抱きながら目の前の男と対峙した。

「……………あの構えは太子流……………」

その呟きに琴代は驚いて目を見開いた。なぜ土佐の人間が会津地方にだけ伝わる剣術の流派の名前を知っているのか？

直後、琴代は元来た道とは反対側の道を急に走り始めた。

（このままじゃ殺されるべ！）

相手は間違はなく手練だろうと琴代の直感は判断した。ここで犬死する訳にはいかない。今は逃げるしかなかった。しかし逃げる琴代を逃す男たちではない。全速力で刀を振り上げながら追ってきた。そうして男たちから逃げていると何処かの広めの通りに出る。

「待て！！」

琴代は後ろを振り返ることなく必死になってその通りを駆け抜ける。すでに頭の鬘はボサボサに解けはじめていたがそれを気にする余裕は無い。ひたすらひたすら逃げる。琴代も男たちも必死だった。

その時……………

「うぎゃあ！！！！」

背後で男が突然悲鳴を上げた。更に複数の悲鳴も同時に上がった。何があったのか振り返った瞬間、琴代の表情は凍りついた。

琴代を追いかけた男たちは地に倒れ付していた。その周りは赤黒い血に満ちている。倒れた男の傍には一人の男が血のついた刀を手に

持ったまま男たちを見下ろしていた。その傍を歩いていた通行人は突然の凶行に驚いて悲鳴を上げ、通りの端まで後ずさりながらその様子を恐怖に満ちた瞳で見つめている。

土佐弁の男らを斬った青年は懐紙で刀の血を拭くと穏やかな笑みを浮かべながら琴代を見た。

「大丈夫ですか？」

しかし何があつたのか未だ理解できない琴代はその光景に立ち尽くしているだけで青年の声に反応できない。琴代を見た後、何かに気づいたのか手の刀を見るとその刀を腰の鞘に収めて琴代の元へ歩み寄ってきた。

「怪我はありませんか？」

声を出せないまま琴代は青年の言葉に黙って頷いた。その反応を見てホッと一息ついた青年は琴代の頭上を見つめると右手を伸ばして彼女の乱れた鬘から何かを取り出しそれを琴代に渡した。かんざしである。

「もう少しで落ちそうだったので失礼ながら抜きました。」

「あ、ありがとうございます。」

その時走ってきた方角から男たちのバタバタと走り近づいてくる足音が聞こえてきた。

「ここはまずい。いったん何処か離れた場所へ移動しましょう。」

そういうと青年は琴代の手を取り斬り伏せた男たちを放置してその場を走り去っていった。

## 第二話「土佐浪士を探して」（後書き）

### 主な出来事

- 1863（文久三）年5月10日 長州藩、下関で外国商船を砲撃
- 1863（文久三）年7月2日 薩英戦争（生麦事件を端に発した争い）



### 第三話「会者の幼言」

名も知らぬ青年に引つ張られながら琴代は洛中の街中を西へと走り抜けていた。もうどれほどの距離を走ったのか分からない。ゼイゼイと息を切らしながら琴代は目の前の青年の後姿を見つめていた。

「大丈夫ですか？」

青年も少しばかりはあはあと息を切らしながら琴代に話しかけた。穏やかな笑みを浮かべながら青年は振り返る。

「はい。」

「もう少しですから頑張ってください。」

そう言くと青年は走る先の道を北へと曲がっていく。少しだけ狭まった道をわき目も振らずにひたすら真っ直ぐ進んでいった。彼は一体どこへ自分を連れて行く気だろ？もう充分あの場からは離れたはずなのにそれでも走ることをやめない青年に琴代は疑問を抱き始めた。

「ここまでくればもう大丈夫です。」

長い距離を走り続けて青年も琴代同様ゼイゼイと息を切らしながら辿り着いた先で両手を膝に置き少し体を屈めながら呟いた。一方の琴代といえば青年ほどの体力は無く止まった途端に着物が汚れるのも構わずにぺたりと地面に座り込んだ。真夏の暑い日の事である。全身は炎のように熱く、照りつける日差しが彼女の体内から水分をどんだん奪っていく。汗は全身から止め処なく地面に向かって流れていった。

「あ、あの……、すみませんでした……。」

暫くして少し呼吸が整ってきたところで琴代は青年に謝った。自分のせいで青年に人を斬らせてしまった。彼は全く無関係の人間であったはずだった為申し訳なく思った。

「謝らなくてもいいですよ。俺が助けたくてそうしただけですから。」

「

「でも、貴方に人を殺させてしまいました……。」

そう言つてうな垂れる琴代を見た青年は走りすぎてふらつく足で彼女の元まで近づくと彼女と向かい合うように地面に座り込んで俯く彼女の顔を上げさせた。そして彼女の目を逸らさずに見つめながら話す。

「貴女が気にする必要はありません。人斬りはむしろ俺にとって仕事のようなものですから。慣れてます。」

まるで心を読み取るように見つめてくる青年の瞳を思わず逸らして彼女は再び俯いた。苦手な目、そう思った。青年はそんな彼女をジツと見つめていたがやがて立ち上がると地面につく琴代の手を取り彼女を立ち上げらせると日の当たらない木陰まで連れて行ってそこに座らせた。

「……………そこで待つていてください。今、水持つてきます。」

そう言つと青年は去つていった。琴代はゆつたりとした速度で離れていく青年の後姿を見送りながら木にもたれ掛かった。

「……………気持ちいい……………」

吹き抜ける風が穏やかで気持ちよかった。それは彼女の額から滝のように流れる汗を冷やし更なる冷たさを増しながら何処とない方向へと吹いていった。

そして辺りを見渡した。青年が連れてきた場所は何処かの寺社だった。決して大きいとは言えない。目の前にある参道を境内に向かつて視線を進めると大きなお寺がそこにあつた。お寺に備え付けられている提灯には『壬生寺』と書かれている。聞きなれない名前だった。

（あの人、何でもここまで連れてきたんだべ？）

あの場から離れるならもつと近い距離でもよかつたはずである。自分がいたのは河原町五条辺り、そこから道を逸れたといつても大した距離ではないはずで更に追いかけられたと言つてもそれ程の長い時間ではなかつた為河原町五条からはそこまで離れているとは思えなかつた。彼は街の中心部を抜け、更に田園道さえも横切つて琴代

をここまで連れてきた。

暫くすると青年は桶を一手に持ちながら戻ってきた。琴代の膝元にそれを置くと青年は琴代の隣に座り込んでふうと深い息をついた。身に着けている長着の裾で額の汗を拭き取る。

「疲れましたね……。」

青年は足元の桶から勺を取ると中の水を汲んでそれを琴代に差し出した。

「どうぞ、先に飲んでください。」

「……ありがとうございます。」

言われるままに彼女は勺を受け取るとゴクゴクと汲まれた水を飲む。喉を流れていく水が冷たくて心地いい。カラカラに乾いていたから生き返るような思いだった。思わず顔が綻ぶ。

「すみません、ありがとうございます。」

飲み干すとその勺を青年に返した。それを青年は受け取り彼もまた水を飲み干す。

「生き返りますね……。」

そう言つて嬉しそうに笑顔を浮かべた青年に琴代も笑顔を浮かべた。それを見て青年は一瞬きよとした後、再び笑顔を浮かべる。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。俺は沖田総司といいます。」

このすぐ隣の新撰組の屯所で隊士をしています。」

「こちらこそ助けていただきましてありがとうございます。私は大見琴代と申します。」

沖田と名乗る青年は「琴代さんですね」と呟くと途端に真顔になつて彼女を見つめた。

「単刀直入に聞きます。先ほどはなぜ男達に追われていたのですか？」

沖田の質問に琴代も真顔になった。しばらく無言で沖田を見た後彼女は俯いた。

「それは……。」

琴代が言い淀んでいる時だった。壬生寺の境内入り口から子供たち

の楽しそうな声が聞こえてきた。沖田はそれを見ると立ち上がった子供たちに手を振った。

「あー！総司にーさん！！」

沖田を見つけた子供たちは口々に彼の名を呼ぶと満面の笑みを浮かべてこちらへと駆け寄ってきた。

「ねーねー、あぼしよー！」

沖田の手を取ってねだる子供たちに沖田は笑顔を浮かべたが一瞬琴代を見ると困ったようにうぐんと唸って首を横に振った。

「ごめん、今は無理なんだ。」

「ええー何でじゃ！？」

口々に不満を口にしていたがやがて沖田の傍で彼らの様子を見つめていた琴代の存在に気づくと子供たちは二人を囁きたて始めた。

「総司にーさんの女子や！」

「いやらし〜。」

何やら勝手に二人の関係を勘違いした子供達はヒューヒューと口を鳴らすと沖田をからかい始めた。沖田は思わず怒りを露にしている。

「コラッ、何勝手に言ってるんだ！そんなんじゃないっ！」

しかし、子供たちはそんな沖田の様子を見てますます面白そうにからかってくる。沖田はチラッと琴代を見る。彼女の表情には変化こそないものの頬はほんのりと朱に染めている。

「ほらっ、今度また遊び相手してあげるからあっち行く！」

そう言っ境内の中心部を指差すと沖田は強制的に子供たちをそちらの方へ連れて行き自由に遊ばせてすぐに戻ってきた。

「楽しそうですね。」

「ははっ、そうですね。さっきは俺たちの事を変にからかってましたけど皆いい子達ですよ。」

琴代の言葉に沖田は笑うとそれきり何も話さず子供たちの遊ぶ姿を見つめていた。琴代は立ち上がるとチラッと沖田の横顔を見つめたあとと彼と同様に子供たちの姿を眺めた。

「琴代さん、子供が好きですか？」

それに琴代は頷く。

「はい。子供たちが笑顔を向けて甘えてきてくれるとそこにおいても許される、必要とされているような気持ちになるので好きなんです。」

「え？」

琴代の言葉に沖田は驚いたように彼女を見た。まさか自分と同じ思いを持っている人間がいるとは思ひもしなかったからである。

「……………俺も、ですよ。何かうれしいな、同じ気持ちの人に出会えるなんて……………」

「沖田さん？」

「琴代さん、俺はね、うんと小さい頃に両親に死なれてしかも貧乏な足軽の家だったために家を出ざる得なかったんですよ。あの時、俺は家族に見捨てられたような気持ちになってどうしようもない寂しさを覚えたんです。だからかな、純粹無垢な子供たちが何の偽りもなく慕ってきてくれるととても安心する。」

沖田の突然の告白に琴代はジツと彼を見つめた。会って間もない人間によもやそんな深い話を聞かされるとは思いもしなかった。ただど……………

(こんな人は…滅多にいない。)

信じられるような気がした。生きていて信じることの出来る人に出会える確立は限りなく零に近い。少しは自分のことを話もいいかもしれないと彼女は感じた。

「分かります。私も子供の頃に母を亡くしていますから。愛された覚えが全くないんです。」

両親の愛情が子供時代において重要である事はお互いに痛感していた。特に母親の愛情はいかに受けてきたかによってその後の己の人格形成に多大な影響を与える。両親の愛情が満足に得られないと己自身にその存在意義を見出せず成人しても迷う。その辛さは口に出して表現できる類のものではない。

「……だけど私は幸せ者です。弟も死んだ父も私の事をいつも心配してくれました。」

「俺も姉達が想ってくれてる事は知ってます。やっぱり幸せ者だな。」

「そうして子供たちの遊ぶ姿を眺めながら過ごしていると一人の武士が琴代たちの元へ近づいてきた。」

「山南<sup>やまなみ</sup>さん。」

「沖田くん、ここにいたのか？……その女性は？」

「穏やかさを前面に出したような笑みを浮かべながら山南と呼ばれた武士は琴代を見る。沖田は事の顛末を話すと山南は再び琴代を見た。」

「その様子だと無事で何よりのようですね。」

「はい、沖田さんのお陰です。」

「ねえ山南さん、俺、琴代さんを家まで送ってくる。帰り道で何かあったら大変だし。」

「沖田の言葉に山南はそうした方がいいと言うと彼の肩をポンと叩く。琴代さん、くれぐれも気をつけてお帰りください。」

「ありがとうございます。」  
山南に軽く頭を下げて礼を述べると琴代は沖田と共に家まで送られていった。

そして長屋に辿り着く頃には日は暮れて辺りは月夜の闇に覆われていた。

「暫くは下手に出歩かないほうがいいと思います。」

「はい。わざわざありがとうございます。」

深々と頭を下げる琴代に沖田はニコリと微笑むと別にいいですよと言う。しかし笑みはすぐに消えジツと彼女を見つめてきた。その瞳は物言いたげに揺れている。そんな彼の瞳を琴代は逸らす事が出来なかった。

「………琴代さん、会いに来てもいいですか？」

「え？」

「貴女に迷惑をかけるような事はしません。ですから会つてもいいですか？」

ひどく切実な、揺れるような声音で寂しそうな表情を顔に浮かべながら沖田は聞いてきた。そんな風に言われては琴代は駄目だといえる訳がない。

「構いませんが……。」

「よかつた……。」

心底安心したように笑みを浮かべると沖田は背中を向ける。

「……壬生寺の境内で貴女から目を逸らされた時、この人は俺に似ているって思いました。間違つてなくてよかつたです。」

「沖田さん。」

「何か子供じみた我侷を言つてしまいましたね。……でも、貴女みたいな人にはそうそう出会えるものじゃない。だから会いに行きます。……今日初めてあつた人なのにこんな事……初めてだ。」

そして振り返つて琴代を見ると「ではまた」と言つてその場を去つていった。琴代は去つていく彼の後姿から目を逸らす事ができなかつた。

### 第三話「会者の幼言」（後書き）

二人の接近ぶりが急すぎる気がします、はっきり言うところの時点  
でお互い恋愛感情抱いてる訳じゃありません。とても複雑です。

会者の幼言は造語です。

これは琴代から見た場合のタイトルです。琴代に出会った沖田さん  
が会って間もない相手に子供心に抱いた感情を彼女に露土するところ  
からこのタイトルをつけました。沖田さんの本音は「貴女に迷惑  
をかけるような事はしません。ですから会ってもいいですか？」に  
暗に込められています。

この言葉を子供なりの言葉に置き換えると、彼の切実な思いが浮か  
び上がってきます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0041j/>

---

琴語りき命

2010年10月15日23時52分発行